

【巻頭言】

## 第三号発刊によせて

立命館 史資料センター長 木立 雅朗

史資料センターの紀要も、ようやく三号を迎えた。

ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

これに満足することなく、史資料センターのさらなる展開を目指したい。

この序文を書いている二〇二〇年二月六日は新型コロナウイルスが世界的に猛威を振るい、京都でも二名の患者が確認されている。新型コロナウイルスの影響で観光客が激減し、観光都市京都も大きな影響をうけつつある。町中を歩く観光客の人数が急激に減りつつあることを実感する。本紀要が刊行される時、そして東京オリympicが開催される時、事態がどうなっているのだろうか。この状況が好転していることを祈りたい。

私は京焼・清水焼の調査のため、五条坂の民俗考古学的調査を続けてきたが、ここ数年間はすさまじい勢いで街並みが変わっている。かつて五条坂界限では二〇前後の登り窯が炎を上げていたと言われるが、公害問題が大きな社会問題として取り上げられた一九七〇年前後に相次いで火を消した。それでも陶磁器の工房・

小売店・問屋は五条坂で販売を継続し、京焼・清水焼の伝統的産地の面目を保っていた。重厚な町家や職人が暮らす長屋の雰囲気も随所に残されていた。二〇一七年一月まで、町屋の奥には六基の登り窯がひっそりと残されていた。

しかし、二〇一七年一二月に最後に残った六基の登り窯のうち、二基が相次いで失われた。その二つとも、ホテル建設が原因であった。観光客の急激な増加がホテル建設ラッシュを引き起こし、伝統的な京焼・清水焼の街・五条坂の景観を一変させた。もはや、陶磁器関係の店よりも、観光客相手の店舗やホテルのほうが目立つ。

鴨長明は都の人々の移り変わりについて次のように述べている。「所もかはらず、人も多かれど、古見し人は二三十人が中に、わづかに一人二人なり」(市古貞次校注一九八九『新訂方丈記』岩波文庫、九頁)。今も昔も京都の人々はそうやって入れ替わってきたのだろう。しかし、近年の観光公害は地域に暮らす人々そのものを排除する傾向にあり、「入れ替わり」とは言いがたい空洞化を引き起こしている。ホテル建設は、遺跡や町屋の破壊と引き換えであり、京焼・清水焼で生計を立ててきた人々の暮らしそのものを直撃している。そのような中で何軒かの窯元から近現代の文書類を預かり、調査させていただいていた。文書類の大半は帳簿類だったが、近現代の京焼・清水焼の生産の実態を生々しく浮き上がらせる、きわめて重要な資料だった。かつての繁栄ぶりもうかがえる。とある工房は戦時中、海軍の受注を受けていたが、戦後、軍関係の文書類は廃棄されたく、直接的な証拠は残っていなかった。しかし、帳簿類を丹念に調べることで軍による軍需品製造の証拠が現れてきたのである。史資料というものは、どこで何が役に立つのか、なかなか想像

できないものだと感じる。

そして、ちょうどこの巻頭言を書いている二月、国会の質疑で「桜を見る会」やその「前夜祭」について名簿や領収書について問題にされていた。保管義務が短いこうした書類こそ重要なのだということ、ここでも感じ入った。こうした史資料を保管管理することは、もはや、社会的な責務だといえよう。

史資料センターでは、永久保管の文書はもちろん、保管期限が切れた文書も含めて保管・管理すべく、奮戦中である。定期的に紀要を発刊するだけでなく、基礎的な史資料を着実に収集保管し、活用の道を切り開いてゆきたい。

二〇二〇年二月六日

